

## 2023年1月29日（日）「キリストの栄光の輝き」

ヨハネの黙示録 1:17-20

17 この方を見たとき、私は死人のようにその足元に倒れた。すると、その方は右手を私の上に置いて言われた。「恐れてはならない。私は最初の者であり最後の者、18 また、生きている者である。ひとたび死んだが、見よ、世々限りなく生きており、死と陰府の鍵を持っている。19 それゆえ、あなたが見たこと、今あること、また後に起こることを書き記せ。20 あなたは、私の右の手に七つの星と、七つの金の燭台とを見たが、その秘められた意味はこうだ。すなわち、七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である。

### 【序論】

あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。（マタイ 5:14）  
これは、主イエスが公生涯の中で弟子たちに語られたことばです。主は教会を「世の光」と呼ばれました。キリスト者は何らかの意味で輝いている存在であるようなのですが、その「輝き」とはどのようなもののでしょうか。物理的な光のことではないでしょう。では、主イエスは何をもって私たちを「光」と呼んでおられるのか。倫理的な意味においてか。それもありませんが、倫理的にも多くの不完全さがあることを私たちは自覚しているでしょう。もっと根源的な意味において、主は私たちを「光」と呼んでおられるはずで、私たちが中にある何が輝いているかを考え、その光を認識し、実際にその光で輝きたい。本当に世を照らすような光を放つ存在でありたいと願うのです。

### 【本論】

今日で黙示録1章が終わりますが、私はこの箇所全体を照らしている「光」に着目しました。主イエスの栄光の輝き、「七つの燭台」としての教会。また、教会に遣わされている天使のことが「七つの星」とも言われています。光の本質に迫ってまいりましょう。

#### 本論 1. 主の栄光の輝き

この方を見たとき、私は死人のようにその足元に倒れた。（1:17a）  
前回扱った箇所（12～16 節）で、ヨハネは大祭司にして審き主なる主の姿を見ました。そこでも主イエスに伴う「天上の光」が様々な表現で説明されていました。「**頭髪は白い羊毛に似て雪のように白く**」「**目は燃え上がる炎**」「**足は燃えている炉から注ぎ出される青銅のよう**」「**顔は強く照り輝く太陽のよう**」。これらは地上の言語では説明できない「光」であり、この世を超越し、罪ある人間には耐えられない輝きです。ヨハネは生身の人間のまま終末の王を見

てしまいましたから、「死人のようにその足元に倒れた」のです。これと類似した記事は、黙示文学的な預言書に複数見られます。

- ・ 周りの輝きは、雨の日に雲の中に現れる虹の姿のようであった。これは主の栄光のような姿であった。私はこれを見てひれ伏した。私は、語る者の声を聞いた。(エゼキエル 1:28)
- ・ 私は彼の話す声を聞いた。その話す声を聞いたとき、私は気を失い、うつ伏せに地面に倒れた。(ダニエル 10:9)

また、主イエスの公生涯において三人の弟子を連れて山に登られた場面がありましたが、そこでも似たようなことが起きています。

六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。すると、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、衣は真っ白に輝いた。それは、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほどだった。《中略》弟子たちは非常に恐れていたのである。(マルコ 9:2-6)

地上にあっては、主はご自分が本来持つておられる神の子としての栄光の輝きを隠しておられた。しかし、その輝きが隠しきれぬ瞬間が稀にありました。一つはこの変貌山の時、もう一つは誕生の時です。尤も、この時は主イエスご自身が輝いたというより、主の栄光を代弁(反映)するかのよう天の軍勢が現れました。

さて、その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が現れ、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。私は、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、産着にくるまって飼葉桶に寝ている乳飲み子を見つける。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、天の大軍が現れ、この天使と共に神を賛美して言った。「いと高き所には栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ。」(ルカ 2:8-14)

ヨハネは変貌山で一度主の栄光を垣間見ていました。そして、黙示録の啓示を受けたとき、もはや何の覆いもかかっている主の栄光を見てしまったのです。

すると、その方は右手を私の上に置いて言われた。(1:17b)

主の「右手」は慈愛と恵みの御手、癒しの御手です。差し伸べられたその手によって、ヨハネはどうか起き上がることができました。これもまた、ダニエルの経験と類似しています。

見よ、手が私に触れ、私の膝と手の先を揺さぶった。彼は私に言った。「愛される者ダニエルよ、私がある場所に語る言葉を聞いて悟れ。あなたがいる場所に立て。私は今、あなたのとこに遣わされて来たのだ。」この言葉が私に語られたとき、私は震えながら立ち上がった。

(ダニエル 10:10-11)

いつの時代にも、終末的な啓示が与えられるとき、栄光の主は同じ姿をもって聖徒たちに現れなさいます。

## 本論 2. 主の自己宣言

さて、次に主イエスがヨハネに語られた自己宣言の内容を見てまいりましょう。

「恐れてはならない。私は最初の者であり最後の者、また、生きている者である。ひとたび死んだが、見よ、世々限りなく生きており、死と陰府の鍵を持っている。(1:17c-18)

この自己宣言には三つの要素が含まれています。

#### ① 最初で最後の者

日本語訳では読み取りにくいのですが、原文を見るとここには「ἐγώ εἰμι／エゴー・エイミ」という、神の自己宣言（私はいる／私はある／出3:14）が隠されていることが分かります。主イエスは公生涯において、この表現をもって、何者にも依らずに存在するご自分の権威、そして永遠にイスラエルと共におられる神の契約を繰り返し示しておられました（ヨハネ8:12、9:5、10:7,9、10:11,14、11:25、14:6、15:1,5）。

「最初であり最後の者」という表現は、「アルファでありオメガである」(1:8)の言い換えであり、これもまた旧約の時代から神がご自分を指して言われていた事柄と一致します。

- ・ イスラエルの王なる主、イスラエルを贖う方、万軍の主はこう言われる。私は初めであり、終わりである。私のほかに神はいない。(イザヤ44:6)
- ・ ヤコブよ、聞け。私が呼び出したイスラエルよ。私がそれだ。私は初めであり、また終わりである。(イザヤ48:12)

このように見てみますと、主イエスはご自分を完全に神と等しい方として呈示しておられるということになります。もはやその栄光を隠すべき時代は終わったのです。

#### ② 世々限りなく生きている者

「また、生きている者である。ひとたび死んだが、見よ、世々限りなく生きており」と、ずいぶん念入りな言われ方がしています。主はご自分が確かに生き続けていることを強調されます。歴史上は、十字架で死んだ聖人という程度の見方をしている人が多いのかもしれませんが。ある方とお話ししていたとき、「イエス様だって死んでしまったじゃないですか」と言われたことがありました。然り、主イエスは確かに十字架で死なれたのです。しかし、キリスト者は証言しなくてはなりません。主が死んで終わったのではなく、復活して多くの弟子の前に現れなされたということ。そして、そのことを証言するために命を捨てた多くの人がいたことを。人は真実のために命を捨てることはできても、虚偽のために命を捨てることはできない。キリスト教会が今に至るまで存続してきたこと自体が、主が生きて働いておられることを証しているのです。

#### ③ 死と陰府の鍵を持っている者

聖書の世界では、「陰府の世界」が存在すると考えられていました。人が死んで肉体から霊が離れると、その霊は暗く冷たく何もない世界へ行くと理解されていた。人と人の交流はなく、静かで、感覚もない。希望もない。主イエスは十字架で死に、ひと度「陰府」へ行かれたと証言しておられます。「死と陰府の鍵」とは、そこへ入った者には決して開けることのできない封印のようなものを意味するのでしょうか。しかし、主はその鍵を持っていると言

われる。すなわち、死から甦ったことは、死と陰府に打ち勝ったことを意味し、主イエスはその世界に対する支配権を持っていると言っておられるのでしょ。つまり、主は死者を甦らせる力を持っておられるということです。

### 本論3. 灯火なる教会

このように自己宣言をされた方は、ヨハネに教会へのメッセージを託します。

**それゆえ、あなたが見たこと、今あること、また後に起こることを書き記せ。(1:19)**

ヨハネが書き記すよう命じられた三つの事柄：

#### ① 見たこと

ヨハネが目撃した、大祭司にして審き主なる主イエスの姿。主イエスは死んで終わったのではなかった。永遠に大祭司として聖徒をとりなし、やがて審き主として世に来られる方であることを世に向けて証ししなくてはならない。

#### ② 今あること

当時の教会が直面していたこの世との戦い、主によって示される教会の課題、賞賛と叱責のことばを伝えなくてはならない。これはあらゆる時代の教会に向けてのメッセージであり、その時代ごとに教会が向き合わなくてはならない現実を鋭く御言葉によって見抜くことが求められている。

私が黙示録の講解を始めなくてはならないと心に示されたのは、今という時代がどこを目指して進んでいるかを読み解き、その巨大な勢力と闘う教会のあり方を考え、キリスト者が如何に福音に立ち続けるべきかを具体的に伝達しなくてはならないと感じたからです。2030年を目標に完成が目指されている暗黒の世界にあって、私たちはどのように信仰を守り続けることができるか。私はそのことを日々考えて生きています。

#### ③ 後に起こること

世の終わりにやって来る大患難時代、最後の戦い、主イエスの再臨、新天新地。ヨハネはこれらのことを、本書を通して具体的に啓示していきます。最終的に光が闇に打ち勝つという約束の下、私たちは映画を見るようにこの世界を眺望することができるでしょう。

**あなたは、私の右の手に七つの星と、七つの金の燭台とを見たが、その秘められた意味はこうだ。すなわち、七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である。(1:20)**  
「七つの星」とは「七つの教会の天使たち」、「七つの燭台」とは「七つの教会」という答えが与えられています。教会は聖なる御使いの守りの中にあるということが言われているのでしょ。そして、教会が「燭台」に譬えられるところに、「世の光」としての役割がある

と言える。真っ暗な闇の中に輝く十字架の光。どんなに闇が色濃く迫ってきても、希望があるのです。教会はなぜそのような光であることができるか。それは、光なる主イエスのからだであるからです。主の栄光の輝きが教会を通して世に現される。教会が真理に立てば立つほど、福音を福音として語れば語るほど、賛美の歌声を力強く挙げれば挙げるほど、主の栄光は世に輝くのです。そして、私たち聖徒一人びとりが行く所どこにあっても、この光が輝き出る。私たちの内に聖霊が住んでおられるからです。この光は誰にも抑えることができません。

### 【結論】

2023 年が始まりました。今年は様々な試練が待ち受けていると思われませんが、あらゆることに心備えつつ、どんな状況下にあっても光として輝き続けたいと思います。私たちと共におられる方は「**右の手に七つの星と、七つの金の燭台**」を持っておられる主イエスです。この方の中からとして、栄光を現し続けられるよう祈りましょう。

### 【祈り】

光であられる神よ。私たちはかつて暗闇のうちを歩んでいましたが、光と出会い、光の子とされ、光を宿す者となりました。私たち自身が気づいていないところで、主が何かを輝かせてくださっています。その光を妨げるものがあるとすれば、それは私たちの罪です。私たちの暗い部分を照らし、神の子としての人生を全うさせてください。そして、この暗黒の世にキリストの栄光を現す者として立たせてくださるようお願いいたします。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

「光あれ」との御声をもって、混沌の世を照らし給うた、父なる神の愛、  
世のはじめより神と共に在し、光そのものであり給うた、主イエス・キリストの恵み、  
人を闇のうちより贖い、光の子としてキリストの栄光を現させ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。